

福島第一原発事故—住民は放射線量の強い津島地区へ避難

10月11日、バスツアーで帰還困難区域になっている浪江町に行きました。事前に浪江町で、区域に入るための許可が必要です。以下は相馬新地・原発事故の全面賠償をさせる会のガイドさんの話に、私見を入れた内容です。

「浪江町は人口約2万人、全員が町外に避難している。昼間は家に帰ることができるが、夜は家に泊れない。浪江町は双葉町・大熊町と異なって、福島第一原発の立地自治体では無いので、東京電力と安全協定を結んでいない。避難計画も無し。原発事故後の避難のためのバスの配車もなかった。

とにかく住民には、原発被害について、国や県から何も知らされなかった。原発事故後、双葉町・大熊町・浪江町の住民は、北西の方向の浪江町津島地区に一次避難した。そこは放射線が強い地区であることを知らないで。津島地区の住民は、小中学校に避難して来た人達への炊き出しや支援をした。その後、避難者達は二次避難でいなくなった。津島地区の住民は、農作業をしたり、子供達は外で遊んだりして普段の生活に戻った。白い服を着た人達が突然にたくさん来たので、何をしているのかと聞いたら、「ここは放射線が強いから、直ぐに逃げなさい」と言われて、初めて避難をした。帰れなくなるとは誰も思ってもいなかった。

隣りの大熊町は、人口約1万人。帰れるようになっても、千人ぐらいしか帰らないのではない。年寄りや帰りたい人が多いが、若い人や子供がある人は帰って来ない。

福島県では、震災関連死は1,753人で、震災直接死を上回った。震災関連自殺者は56人で、年を追う毎に増加している。」

福島県浪江町 帰還困難区域と居住制限区域域に行く

浪江町では、請戸地区へ行きました。漁港で家も多かったとのこと。今は見渡す限りの野原で、セイタカアワダチ草や雑草が生い茂っています。ガレキの山があり、所々には自動車や船が横たわっています。3年7カ月経って、時間が止まったままです。遙か彼方には、福島第一原発の煙突が見えます。

JR 浪江駅前は無人で、ロータリーには、「安心して暮らせるやさしいまち」と書かれた標識が経っていました。浪江町が東京電力と共に目指したまちでした。駅前の通りは文字通りのシャッター通りです。(当たり前)

ちなみに放射線量は、請戸地区で0.28マイクロシーベルト、浪江駅前で1.63マイクロシーベルトでした。基準値は0.23マイクロシーベルト/日です。

* 避難区域からの避難者 80,942人 (2013年12月) 内帰還困難区域 約24,700人 居住制限区域 約23,300人、避難指示解除準備区域 約32,900人

“二十年は帰れぬと言ふに 百歳の母は 家(うち)への荷をまとめをく” 吉田 信雄

【野原には車や船が横たわったままー3年7カ月、時が止まっている（請戸地区）】



【究極のシャッター通り（JR 浪江駅前通り）】

